卒業論文発表

甲良家図面を通して見る陽明門彫刻と甲良宗広の関係性

2024/11/11　中谷研究室
千年村ゼミ・装飾勉強会所属
1X21A061　北澤宏太郎

【目次構成】

【序論】
第0章
0-1　研究動機と対象
0-2　研究背景
0-3　研究目的
0-4　日光東照宮の概要
●歴史　現在の姿になるまで
【元和の創建】
【寛永の造替】
●陽明門
0-5　既往研究と本研究の位置付け
●「東照宮」大河直躬著
●甲良宗広に関する伝承
【東京都立図書館文化財ウィーク】
【甲良豊後守宗広】
●作事方生産組織体系のなかの彫刻
【江戸幕府の作事において彫物を担当した工匠の変遷と彫物大工棟梁の確立】
●本研究の位置付け

【本論】
第1章　陽明門装飾の生産体制について
1-1　造営における生産組織構造
●全体の生産組織体系
●甲良宗広
1-2　陽明門装飾の種類
●絵様
●金物
1-3　小結　絵様・金物分野からわかること

第2章　文献分析
2-1　彫刻分野においてもデザインの境界線は存在したのか
2-2　分析手法
2-3　分析結果
●伝承・逸話
【伝承・逸話の内容からわかること】
【工事期間を基に伝承・逸話の妥当性を考える】
●当時の大工生産組織に対する既往研究
【既往研究の内容から導けること】
2-4　小結　分析結果からわかること
●彫刻分野の不明瞭さ

第3章　図面分析
3-1　甲良宗広による具体的な彫刻設計部位
3-2　分析手法
3-3　対象資料と資料情報
●確認できた甲良宗広による設計図
●甲良宗広以外の棟梁による図面
●資料の選定基準
●対象資料
●資料情報(木子文庫について)
3-4　各図面の情報と具体的な分析手法
● 芝増上寺台徳院殿御宮殿下絵図
● 下野日光山献備五重御塔建地割下絵図
● 増上寺台徳院廟所本殿拝殿図
3-5　分析結果
● 芝増上寺台徳院殿御宮殿下絵図
● 下野日光山献備五重御塔建地割下絵図
● 増上寺台徳院廟所本殿拝殿図

第4章　考察

第5章　結論

第6章　参考文献

【序論】

第0章

0-1　研究動機と対象

筆者の所属する装飾勉強会では、主として西欧世界における装飾のあり方について議論している。それに対し本研究では西欧世界とは異なる、自国日本における建築装飾の在り方を考えるため、日本建築装飾の極致ともいえる日光東照宮陽明門をテーマに選んだ。

0-2　研究背景

日光東照宮陽明門は、その過剰なまでの装飾性でそれまでの日本建築と異なる出立ちである。そしてその装飾性は絵様、金物、彩色、彫刻など様々な要素が存在している。その中でも彫刻は、陽明門が別名「日暮門」と称されるように重要な要素である。本研究ではこの彫刻に焦点を当てた。

0-3　研究目的

陽明門彫刻の背後には、上位者としての設計者と下位者としての各工匠の間にどのような緊張関係、境界線が存在していたのか。これを明らかにすべく、彫刻表現が設計段階及び設計者一族間の図面上でどの程度まで描写されていたのか、文献と図面への分析から紐解く。

0-4　日光東照宮の概要

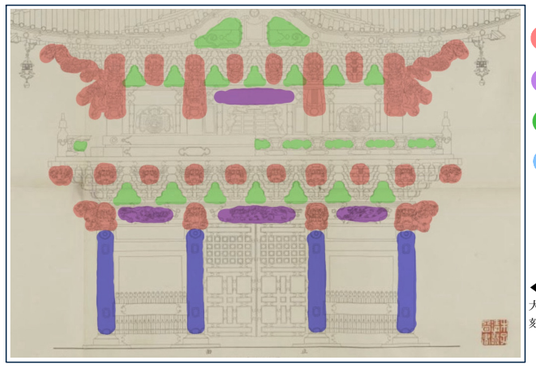
●歴史　現在の姿になるまで
【元和の創建】
家康は日光山に小さな堂を建てるよう遺言をのこした。これに基づいて死後完成した建物は、大河によれば「装飾的表現の強烈さなどを認めるにはむつかしい」(大河直躬著「東照宮」p.55 l.11～12)。

【寛永の造替】
家康の二十一回神忌を念頭に、三代将軍家光の命により寛永十三年に完成した、現在の東照宮の姿。

●陽明門
陽明門は寛永造替度に建造された楼門で、回廊によって分断された本殿拝殿の空間と、表の空間を繋ぐ性格を持つ。日光東照宮の建築物の中でも装飾密度が高く、特に彫刻数の多さでは本殿、拝殿に次ぐ量であり霊廟の核となる建造物の一役を担っている。

0-5　既往研究と本研究の位置付け

●大河直躬著『東照宮』鹿島研究所出版会　SD選書 1970
大川直躬は、陽明門彫刻をその性格に基づいて大きく四つに大別している。
①ほんらい建築の部材であるべきものの一部を、彫刻に変化させたもの(p.156 l.3)
②横架部材の表面に大規模な彫刻を取り付けたもの(p.156 l.8)
③羽目板表面に彫刻をとりつけたもの(p.156 l.11)
④建築の軸部材の表面にほどこされた各種の文様の浮彫(p.157 l.4)



◀図1
大河による彫刻の四分類

②と④の彫刻について、「これまでみた建物にはなかった新しい手法が現れてきたことである。さらにこれが陽明門の表現全体にも大きな特色を与えている。」（p.157 l.13-15）とした。
また、大棟梁と彫刻の関係について、「習熟した表現効果についての知識や経験によって、その主題、位置を決定しうるのみである。」(p. 90 l.12-15)とした。

●甲良宗広に関する伝承
●東京都立図書館文化財ウィークには、当時の甲良宗広に関する世間からの評価が記されている。
●甲良宗広の出生地、甲良町教育委員会編集の「甲良豊後守宗広」では、甲良宗広と彼の彫刻範囲に関する逸話が記されている。

●作事方生産組織体系のなかの彫刻
●伊東龍一は論文「江戸幕府の作事において彫物を担当した工匠の変遷と彫物大工棟梁の確立」で日光東照宮寛永造替時の大工生産組織の記録から、彫物大工の立ち位置を論じている。

●本研究の位置付け
陽明門研究は後年の視点による分類手法が主となっており、本研究では当時の文献や図面情報から、設計段階の視点で分析、考察を行う。

【本論】

第1章　陽明門装飾の生産体制について

1-1　造営における生産組織構造

●全体の生産組織体系
実際の建築工事は幕府作事方大棟梁の甲良豊後宗広が指揮した。

●甲良宗広
日光東照宮寛永造替における大棟梁。大河は著書「東照宮」にて、甲良宗広が日光東照宮寛永造替を指導したことは広く知られた事実としながらも、「甲良宗広を作者として念頭に置いて、東照宮の建築をみるとき、その印象はかなり複雑なものである。なぜなら、甲良宗広の役割を、近代の「建築家」に似たものと考えると、東照宮の建築をいくつか見るうちに、その様式や装飾が多種多様なことから、果たしてそのような統一された指導や計画があったのだろうか、という疑問が湧いてくる。」(大河直躬著「東照宮」p.78 l.3～7)とし、「甲良宗広の仕事、その指導の範囲をきめることもなかなか困難である。」 (大河直躬著「東照宮」p.79 l.5～6)と述べている。

1-2　陽明門装飾の種類

本研究では彫刻分野における設計者（甲良宗広）と工匠間の関係に迫ることが命題である。しかしながら、前述のとおりその具体的で決定的な資料は存在しないため、まず周辺分野である絵様・金物分野を参考にする。

●絵様
陽明門の建設において絵様は画題と画風の規定があったものの、実質的な意匠表現を決めていたのは狩野探幽ら狩野派一門の高格の絵師だったと考えるのが妥当であり、大棟梁の介入からもっとも遠い職能分野の一つだったと推測される。

●金物
陽明門金剛作の頭部の大きさは概して同じ寸法であり、中央に牡丹、それを囲うように唐草文、また側面に麻の葉様文という基本的な図題と構成さえ守っていれば、それぞれの具体的な文様の意匠表現は現場の各職人の好みに従っていたことがうかがえる。

1-3　小結　絵様・金物分野からわかること

絵様、金物ともに職能集団としてかなり独立した環境で制作していたと推測できる。双方における具体的な意匠表現は大棟梁よりも各職能組織内の棟梁が深く関係している可能性が高い。一つの指標として同じ装飾分野である彫刻においても題や手法の選定が主な大棟梁の仕事であって具体的な彫刻の意匠表現は各工匠の自由に委ねられていたと考えるのが自然である。
一方で、同じ装飾領域だからといって同様の構造が彫刻分野にも当てはまるとするのは安易な推測であるという意見も認められる。大河直躬は「建築様式や彫刻を軸とした統一は甲良宗広が行うが、その統制下に縛られない絵師・石工・蒔絵師・鋳物師などが自分の分野を仕事をしている。」(「東照宮」p.94 l.9-10)とし彫刻と絵様・金物は同じ装飾でありながらも両者の設計上位者である甲良宗広との関わり方には強弱が存在するとした。つまり、彫刻分野の方がより積極的に甲良宗広の指導があったと考えられる。

第2章　文献分析

2-1　彫刻分野においてもデザインの境界線は存在したのか

甲良宗広と彫刻に関する文献は主張が食い違う内容が多分にあるため、＜逸話・伝承＞と＜記録の既往研究＞の二つに分けて分析する。

2-2　分析手法

文献に記述された伝承と、当時の記録、組織体系の視点からその妥当性を評価する。

2-3　分析結果

●伝承・逸話
東京都立図書館2011文化財ウィーク(49)によれば、当時から甲良宗広は彫刻の名手としてしられており、江戸幕府第二代将軍徳川秀忠の霊廟である台徳院造営時には、「甲良宗広の装飾の彫物が評判を呼び、諸大名の江戸屋敷の建築にも係ることになりました。同じく彫物に長じた鶴家とともに「鶴亀（甲良のこと）」と呼ばれて庶民に親しまれたそうです。」といった逸話が残っている。
また、「甲良豊後守宗広」(甲良豊後守宗広編集委員会／編集　甲良町教育委員会1993)によれば、甲良宗広は慶長八（1603）年近衛関白家（近衛信尹）の館門を建て、この功が認められ従六位左衛門尉の官位を与えられたとしている。

そしてこの時建てた館門の門扉の左右の出来を左甚五郎と甲良宗広が競ったという伝説(p.13 l.11-p.14 l.2)があり、左甚五郎の評価が主として彫刻作品によるものを考慮すると、甲良宗広もまた彫刻に対して高い造詣があったと推測できる。左甚五郎はこの造営から31年後に、甲良宗広が大棟梁として勤めた日光東照宮寛永造替にてかの有名な眠り猫や三猿といった彫刻を手掛けたと伝わる。同著は「増上寺の彫刻全てを宗廣が担当したといわれているのです。」 (p.24 l.13～14)と記している。

【伝承・逸話の内容から導けること】
甲良宗広自身が高い彫刻への理解と彫物の能力があった可能性が高い。少なくとも、絵様、金物に関する甲良宗広の逸話が彫刻に比べて圧倒的に少ない（ないといって差し支えないだろう）ことからも、絵様、金物よりは彫刻の方が高い能力があったことは明らかである。これは絵様、金物分野との大きな相違点であり、絵様や金物においては基本的に専門外であった甲良宗広は直接監督できるほどの専門的な知識や能力自体がなかったのに対し、彫刻分野に関しては左甚五郎と比べられるほどの、その道のスペシャリストであったという推測ができる。これは彫刻分野への指導の有無は別として、指導できるだけの実力があったことは間違いないだろう。

【工事期間を基に伝承・逸話の妥当性を考える】
寛永11年(1634年)9月(又は10月)に当代将軍家光より寛永の大造替の命が発せられた後、仮殿の造営を得て実際に着工したのは翌年4月11日であり、寛永13年4月8日に上棟式が行われている。これらの時系列から逆算すると、造替の命から最初の着工まで約半年間であり、上棟までは１年半という短い期間で造営されたことになり、この期間で陽明門を始め日光東照宮全体の彫刻を担当するのは設計、彫刻行為双方において非現実的である。

●当時の大工生産組織に対する既往研究
伊東龍一著「江戸幕府の作事において彫物を担当した工匠の変遷と彫物大工棟梁の確立」によれば、1636年の日光東照宮寛永造替時には、「日光山東照大権現様御造営目録」によって、彫物大工が独立した職能集団として参加していたことがわかる。また、彫物大工の作料・飯米を甲良宗広が一括で受け取っており、後の勘定帳に彫物大工の中から作料・飯米を受け取る名が記されていることから、日光東照宮寛永造替の時点では彫物大工という職能集団として独立はしていたものの、棟梁格が存在するほど確立された存在ではなかったと考えられる。また、日光東照宮寛永造替時の二年前、台徳院霊廟造営時においても、彫物を多用した建物であるにも関わらず彫物大工の名は記されていない。代わりに彫物大工が従っていたとされる甲良宗広の名がある。

【既往研究の内容から導けること】
絵様、金物分野においてはそれぞれ棟梁格が存在する独立した職能集団であったのに対し、彫物分野はその新しさゆえに未熟な組織構造であったと推測できる。そして元々彫刻能力が高かった甲良宗広が、この分野の棟梁格として率いることになったと考えるのが妥当である。

2-4　小結　分析結果からわかること

日光東照宮寛永造替時は彫物大工が独立した職能集団としての立場の確立が不完全であり、世間の彫物大工の活躍に対する認知が薄かった。こうした構造の組織環境において、唯一名が記されており、かつ棟梁格を担った甲良宗広が、やがて絵様分野の狩野探幽のような存在として、一般の人々に認知されていった結果、彫刻に関する多くの逸話が生まれたのではないかと推測できる。

●彫刻分野の不明瞭さ
絵用・金物については具体的な甲良宗広と工匠組織の関係が既往研究や文献より推測することが可能だが、彫刻についてはその境界は非常に不明瞭である。そして日光東照宮陽明門が俗に日暮門と言われているように、その様相の形成に彫刻が支配的であることを鑑みれば、彫刻における甲良宗広の意匠への規定と各工匠による自由意匠の間にある境界線の顕在化が命題となる。

第3章　図面分析

3-1　甲良宗広による具体的な彫刻設計部位

大棟梁と彫物大工の関係性が具体的に彫刻意匠表現としてどのような形質的特徴を有しているのかを把握するために、本章では形質的情報すなわち図面を対象として分析を行う。

3-2　分析手法

当初、設計段階の絵図に描かれた彫刻と、描かれなかった彫刻を図面と実際の陽明門を比較し把握することを試みたものの、陽明門の設計段階図は現存しないことから、甲良家が作事方大棟梁として関わった現存する徳川歴代将軍霊廟建築図に対して霊廟建築としての互換性に基づいて同様の図面分析を行い、陽明門彫刻の意匠境界線を推測する。

3-3　対象資料と資料情報

●確認できた甲良宗広による設計図
まず、甲良宗広直筆による設計段階の資料は芝増上寺台徳院殿御宮殿下絵図(図)のみを確認できている。ここでいう宮殿とは、仏像や位牌などを安置する厨子のうち、小建築的なものを指す。

● 甲良宗広以外の棟梁による図面
芝増上寺台徳院殿御宮殿下絵図のみでは比較分析のための資料としては不十分であるため、周辺資料から不足情報を補うことを試みた。甲良家のものとされる霊廟建築に関係した図面は豊富に残されているものの、資料としての信頼性の観点から、本研究で以下の選定基準を基に対象資料を選別した。

●資料の選定基準
甲良家の銘が入っていること。また、年代を特定できることから建築物の創建年と照らし合わせて設計図か実測図か判別できるものに限る。

●対象資料
前項の選定基準をもって3点の資料を選別した。
・芝増上寺台徳院殿御宮殿下絵図　東京都立中央図書館特別文庫室所蔵
・下野日光山献備五重御塔建地割下絵図　東京都立中央図書館特別文庫室所蔵
・増上寺台徳院廟所本殿拝殿図　東京国立博物館収蔵

●資料情報(木子文庫について)
木子清忠氏によって収集・作成された書物である。尚、「ひびや第140号」(1991)に収録されている、資料部参考課特別文庫室編纂の「東京都立中央図書館　特別文庫室所蔵　木子文庫について」によれば、木子清敬は「日光などの古社寺修理工事の顧問も勤めてきた。」ものの、甲良家との関係については、「江戸時代に木子家との関連は認められず、」と記されている。

●台徳院と陽明門の互換性について
台徳院霊廟は、寛永9（1632）年に造営された、二代将軍徳川秀忠の霊廟建築であり、甲良宗広が棟梁の一人を務めた。また、増上寺の台徳院模型に関連して発行された「台徳院殿霊廟模型ガイドブック」において、著者ウィリアム・コールドレイク（東京大学大学院情報学環特任教授兼工学系研究科建築学専攻客員研究員）はトピックの一つに「日光東照宮の原点＝台徳院殿霊廟」とタイトルを付けたうえで、「台徳院殿霊廟をさらにグレードアップしたのが陽明門であったと考えれば、日光東照宮のこれほどまでの絢爛さの原点が台徳院殿霊廟であったと結論づけられる。」と記した。
一方で、既往研究に基づけば大河は②「横架部材の表面に大規模な彫刻を取り付けたもの」と④「建築の軸部材の表面にほどこされた各種の文様の浮彫」に該当する彫刻はこの時点では登場していないと述べている。

3-4　各図面の情報と具体的な分析手法

●芝増上寺台徳院殿御宮殿下絵図
霊廟建築に関する設計段階で唯一甲良宗広の銘が確認できる図面形質的特徴を指摘したのち、他図面の形質特徴と比較する際のベンチマークとする。

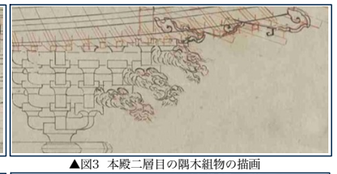
● 下野日光山献備五重御塔建地割下絵図
日光東照宮五重塔の再建図とされる図面。現存する五重塔と比較することで、甲良家の職能担当範囲をより具体的に検討する。

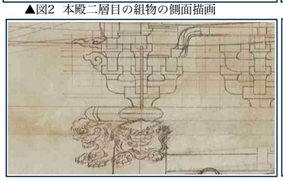
● 増上寺台徳院廟所本殿拝殿図
嘉永五（1852）年に甲良保之助によって作成された実測図面。着色され緻密な装飾が描き込まれた部分と、基本的な（構造のみの）省略された部分の二つの表現手法によって構成されており、これを戦災焼失前の写真や近年公開された実測模型と比較分析する。

3-5　分析結果

●芝増上寺台徳院殿御宮殿下絵図
一層目の木鼻に施された唐獅子（図4.5）や、二層目の組物や尾垂木（図2.3）に施された龍など、立面図としての基本的な建築の構造だけでなく、いくつかの彫刻が既に描画されている。左側の組物描画（図）は組物を側面の視点からとらえたものであるのに対して、右側（図）は隅木（平面に対して斜め45度）の組物を描画している。この左側の組物に施されている彫刻は、側面からの描画がある以上、隅木を除いた宮殿四方の組物にも施されていたはずだが、正面の組物にはそうした存在していた（この時点で計画していた）であろう彫刻物を正面から表したような描画は一切確認できない。

▲図2　本殿二層目の組物の側面描画


▲図3　本殿二層目の隅木組物の描画


▲図4　本殿一層目の組物側面と木鼻の描画

▲図5　本殿一層目の隅木組物と木鼻の描画

それ以外に、特筆すべき表現として虹梁への彫り込みによる文様表現（図6）や蟇股の形状の描画がある。

▲図6　虹梁

●下野日光山献備五重御塔建地割下絵図
実際の建築物で十二支が施されている一層目蟇股に注目すると、設計図では蟇股の形状のみが描画されており、文字で蟇股内部のスペースに「十二支」と表記されている(図7)。

▲図7　蟇股彫刻における設計図(左)と実際の彫刻(右)の比較

●増上寺台徳院廟所本殿拝殿図
木鼻や組物には唐獅子や龍、または龍から派生した幻獣が描かれている。本殿二層目の組物右端に描かれている彫刻（図8）を、同一箇所を撮影された戦前の写真資料（図10）と比較すると、これは建築四方に配された組物の彫刻ではなく、隅木組物の彫刻を描画表現していることがわかる。また、省略された部分において隅木組物以外の本来存在していた組物彫刻が描画されていない（図11）ことを明らかにした。この点に注目すると、本殿一層目木鼻に施されていた龍と本殿二層目木鼻に施されていた唐獅子も正面からの描画が省略されている。
また本殿二層目組物には花肘木(図9)が存在しており、模型からも確認できるが、図面上では描画されていない(省略されている)。

▲図8　本殿二層目隅木組物

▲図9　台徳院殿霊廟模型の二層目組物に位置する花肘木

▲図10　戦災消失前に撮影された台徳院殿霊廟本殿二層目の組物

▲図11　本殿二層目組物部分

軒下に横たえる龍の彫刻（図10）は図面上では確認できないことに加え、「丸桁に配されていた全体雲龍の彫刻は、模型ではわずかに数枚の鱗が残されているばかりである。」と、模型においてもその全体像は紛失してしまっており、戦前の写真資料のみが残されているわけだが、写真上での彫刻の形状からは、実際にこの彫刻は陽明門の龍同様、後付けで軒桁に装着された可能性が高いと考えられる。

▲図12　蟇股とその周囲

▲図13　組物と組物の間に位置する彫刻

蟇股とその周囲の彫刻（図12）および組物と組物の間に位置する彫刻（図13）について、蟇股自体は省略された図面においても描かれているものの、蟇股周囲の彫刻と組物同士間の彫刻は省略されている。彫刻分野ではないので本研究の分析対象ではないものの、絵様、金物はともに等しく全て省略されている。

第4章　考察

図面分析結果より、図面上に描画されている彫刻は建築構造部材に施されたものが主となっており、具体的には以下の２点が認められる。
・組物や木鼻の幻獣の題の決定とそれらの簡単な姿態の指示
・虹梁や蟇股への彫り込み文様のデザイン
これらの彫刻は甲良宗広自身の職能領域に関連していたと考えられる。またこの２点は、大河直躬の陽明門彫刻への４分類において①「ほんらい建築の部材であるべきものの一部を、彫刻に変化させたもの」と同一の特徴を有する。

大河の主張では大棟梁の職能範囲について、「この時代の建築装飾のいちばん重大な要素である彫刻について、その位置と主題を決定することである。このばあい、甲良宗広や平内正信は彫刻の名手であったが、あの多数の彫刻にみずから手を下すことはできない。習熟した表現効果についての知識や経験によって、その主題、位置を決定しうるのみである。」(大河直躬著「東照宮」p.93 l.12-15)としているが、図面分析結果に基づくならば実際はもう一歩踏み込んだ領域、例えば、組物に施された龍でれば頭から胴の一部までの範囲をどのくらいのスケールやプロポーションで設けるのかといった点まで計画していたと考えられる。

また虹梁や蟇股への彫り込み文様のデザインについて、蟇股はその後、大河の分類によれば③「羽目板表面に彫刻をとりつけたもの」の性格を持つ彫刻によって形状が上書きされるケースが多いが、虹梁については設計初期段階からかなり正確かつ詳細に甲良宗広によって彫り込まれる文様が決定されていたと考えられ、大河が著書「東照宮」にて指摘した「建築の細部の形（たとえば蟇股・虹梁・木鼻の形など）について、これらが大棟梁の統制から遠いもの」(大河直躬著「東照宮」p.98 l.5-6)という主張とは相反する。

基本構造以外の部位に施された彫刻は、ほとんどが③「羽目板表面に彫刻をとりつけたもの」に該当し、ここに分類された彫刻に限定すれば、彼の「大棟梁は彫刻の主題と位置を決定しうるのみ」という主張を強化できる。
下野日光山献備五重御塔建地割下絵図において、彫刻の題のみが記載されている点は、甲良家の棟梁としての仕事において、③にあたる分野の意匠表現を各工匠に任せており、棟梁は③彫刻において主題のみを決定していたという何よりの証拠だと考えられる。

同じく基本構造以外の部位に施された彫刻の例外として、大河による分類の②「横架部材の表面に大規模な彫刻を取り付けたもの」に該当する彫刻があげられる。ここに分類された彫刻手法に甲良宗広がどの程度関係していたかを示す決定的資料は本研究の文献・図面分析を通しても不明である。しかしながら、これは彫刻を材に後付けするという点において共通の工程を持つ③「羽目板表面に彫刻をとりつけたもの」の彫刻手法を参考にある程度推測できる。蟇股の内側に彫られた比較的小さいスケールの彫刻でさえ主題が大棟梁に決定されていたのを鑑みれば、陽明門の一層目、二層目の頭貫に施された龍と唐獅子はスケールも大きいうえに、非常に目立ち陽明門全体の雰囲気形成に大きな影響を与える位置に配されているので、おそらく甲良宗広が関わっていたのではないかと推量する。

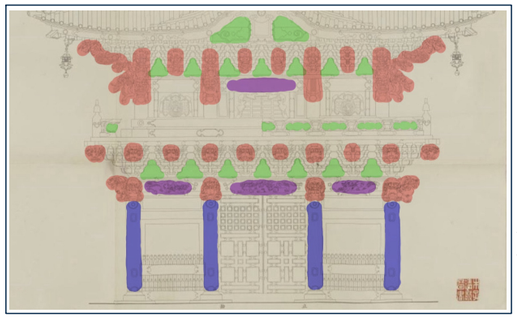
また大河は陽明門の特徴として、この②「横架部材の表面に大規模な彫刻を取り付けたもの」と④「建築の軸部材の表面にほどこされた各種の文様の浮彫」に分類される彫刻について、「これまでみた建物にはなかった新しい手法が現れてきたことである。さらにこれが陽明門の表現全体にも大きな特色を与えている。」と述べている。

これに関して分析結果からは、②「横架部材の表面に大規模な彫刻を取り付けたもの」の性格を持つ彫刻は既に台徳院霊廟から確認することができ、建築史全体の潮流という視点からは陽明門造営時でも新しい部類であるが、決して陽明門から用いられ始めた手法ではないことがわかる。

一方で④「建築の軸部材の表面にほどこされた各種の文様の浮彫」の手法は陽明門以前の霊廟建築でも確認できないことから、陽明門において初めて使用された彫刻手法である可能性が高く、大河の唱えた独自性を見出すことは確かにできる。

第5章　結論

陽明門彫刻を甲良宗広との関係性から、以下の四つに分類できる。
A　甲良宗広自身によってある程度の形質特徴まで決定されていた彫刻
B　甲良宗広が意匠表現に関わっていないと考えにくいものの、それがどの程度であるかは不明な彫刻
C　甲良宗広自身は主題のみを決定し、具体的な意匠表現は彫物大工に任されていた彫刻
D　甲良宗広との関係性を具体的に明らかにできない彫刻
これは大河直躬に分類された彫刻と対応している。



◀図14
甲良宗広との関係性を踏まえた彫刻分類の分布

第6章　参考文献

●参考文献
○大河直躬『東照宮』鹿島研究所出版会　SD選書 1970
○ 佐々木静一『文様研究報告書1 日光東照宮建造物装飾文様調査報告I 陽明門金剛柵の頭部および、寄進燈籠について』多摩美術大学文様研究所　1974
○ 高藤晴俊著『図説　社寺建築の彫刻　ー東照宮に掘られた動植物』東京美術 1999
○伊東龍一『江戸幕府の作事において彫物を担当した工匠の変遷と彫物大工棟梁の確立』日本建築学会計画系論文報告集 第411号・1990年5月
○ 「甲良豊後守宗広」甲良豊後守宗広編集委員会／編集　甲良町教育委員会 1993
○「東京都立図書館2011文化財ウィーク(49)」
○「東京都立図書館2012文化財ウィーク(77)」
○「東京都立中央図書館　特別文庫室　木子文庫について」ひびや:東京都立中央図書館報 1988
○「木子文庫」東京都立図書館　特別文庫室
○西和夫著『江戸建築と本途帳』
○『大徳院殿霊廟模型ガイドブック』
●出典
○図1 ［東京帝国大学紀要工科第１冊第２号付図上］第２５図（日光東照宮陽明門立面図)に筆者加筆
○図2〜5　芝増上寺台徳院殿御宮殿下絵図の該当部分切り抜き
○図7　下野日光山献備五重御塔建地割下絵図の該当部分切り抜き(左)
フォートラベル旅行記日光19　東照宮a　五重塔　華麗な模様/十二支に彩られ(右)
○図8　増上寺台徳院廟所本殿拝殿図　(東京国立博物館収蔵)の一部切り抜き
○図9　ウィリアム・ゴールドレイク著『台徳院殿霊廟模型ガイドブック』p.65より
○図10　奈良文化財研究所
○図11　［東京帝国大学紀要工科第１冊第２号付図上］第２５図（日光東照宮陽明門立面図)に筆者加筆